豊臣秀長

ある補佐役の生涯

上巻

堺屋太一

文春文庫

文春文庫

豊臣秀長（下）

定価はカバーに表示してあります

1993年4月10日　第1刷

著者　堺屋太一
発行者　新井　信
発行所　株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-719315-9

文春文庫

豊臣秀長

ある補佐役の生涯

（上）

堺屋太一

はじめに

私が、「この人」に興味を憶えるようになったのは、いつの頃からか、今は思い出せない。大阪の高等学校に通っているうちか、東京の大学に入ってからか、いずれにしろ三十年近くも前の事だ。

私が、「この人」に関心を持つようになった動機が、何であったかも、憶えていない。「この人」の肖像を見たとか、著作に接したとか、あるいは「この人」について書かれた書物を読んだというようなものではなかったことだけは確かだ。「この人」には、著書などないし、「この人」を主題にして書かれた書物も今もって見当らない。

「この人」の肖像が京都と大和郡山にあることを、私が知ったのは、つい最近、この一文を書く気になってからのことである。つまり、「この人」はそれほどに語られることも研究の対象になることも少ない存在だった。

私が、「この人」に関心を持つようになったのは、むしろ、この「語られなさ」のためだったように思う。史料と史家に等しくその才能と功績を認められながら、語られる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

ことのきわめて少なかった人物、ということが、とかく喧(かまびす)しい自己宣伝の多い現代社会の中でひどく特異に思えたのだ。

だが、私は歴史の中に埋れた人傑を掘り出して、自由な想像を楽しもうというつもりはない。

「この人」は、いわゆる「謎の人物」とか「抹消された悲劇の英雄」とかいった類にはほど遠い存在である。

「この人」には、不明の部分も多いが、「謎」というような隠された暗い感じはほとんどない。また、時の権力者や後世の史家によってその事績が削られた形跡もない。「この人」の生涯と果した役割には、そんな必要はあまりなかった。もし、「この人」の事績を歴史の表面からわざと隠した者があるとすれば、「この人」自身だろう。

もちろん「この人」は無名の人物ではない。数々の資料の中に、その名は繰り返し記録されているし、おそらく生存中には今日想像される以上に著名な存在だったに違いない。

「この人」が果した功績は非常に大きく、握った権限は著しく強かった。「この人」の人生は——少なくともその後半世は——まばゆいばかりの栄光に包まれている。何しろ「この人」は、百十六万石の大封を得、従二位権大納言の高位に至り、天下の政(まつりごと)の中枢に深くかかわり、百戦不敗の武功を誇り得た。しかも、「この人」は、その生涯の絶

頂期において長い病いの末に生涯を終え、自らの大封を自らの養嗣子に譲ることができた。つまり、「この人」は功績を積み出世を重ね、至福のうちに天寿を全うしたのである。

「この人」が生きた時代、戦闘騒乱が絶えなかった十六世紀後半の日本には、英雄人傑が輩出し、それぞれに一家を成し一国を築いた。しかし、急速な成功者の多かったこの時代でも、「この人」以上の大封を得た人物は「天下人」と呼ばれる三人――織田信長、豊臣秀吉、徳川家康――のほかにはほとんどいない。敢えて捜せば、中国の雄・毛利元就が、不安定な状況ながら、かろうじてそれに匹敵する封領を持てたといえる程度である。つまり、「この人」は三人の「天下人」に次ぐ地位に昇ったのだ。

この一事だけでも、「この人」のなし得た成功がいかに大きかったかが分るだろう。特に、「この人」の少青年期が貧窮下賤のどん底にあったことを思えば、「この人」が三十年足らずの間に駆け上った出世街道の長さには改めて驚かされる。その生涯のうちに、これ以上の格差を駆け抜けた人物は、日本史上ではただ一人、「この人」の兄・豊臣秀吉だけであろう。たとえ、「太閤の弟」という途方もなく有利な血縁があったとしても、これはまた、奇跡的な人生といわざるを得まい。

しかし、「この人」の人生において、より奇跡的なことは、それほどの成功者でありながら、その業績と才能と生涯について記述されることがきわめて少なかったことだ。

織田信長、豊臣秀吉、徳川家康については、真偽とりまぜた伝記や逸話が数限りなくあり、小説、演劇、講談のテーマとして数知れぬほどに取り上げられている。「この人」が持った封領と権限に比べれば、一地方の小領主でしかない武田信玄、上杉謙信、前田利家、伊達政宗らでさえ、研究や創作活動のポピュラーな主人公となっている。「この人」の生きた時代は、日本史上最も多く文芸作品のスターが生れた時代なのだ。にもかかわらず「この人」については、史家も講談師も奇妙なほどに語りたがらない。

しかし、その原因が「この人」の凡庸さの故と考えることはできない。「この人」は、単に「太閤の弟」という縁だけで出世したのではない。その才能と人格の高さ、豊臣政権の樹立と維持に果した貢献の大きさについては、全ての史家が等しく認める所だ。中には、兄・秀吉があれほどの成功をなし得たのは「この人」のようなよき弟を持ったせいだという者さえいる。

また、「この人」が豊臣政権の一員であったためとか、偉大な太閤の一族であったが故に研究創作の対象とならなかった、とするのも正しくはない。「この人」に比べれば、果した功労の点でも達し得た栄達の高さでもはるかに劣る豊臣政権の構成員たち、非才無能な太閤の一族についても少なからぬ書物や論文が書かれている。

「この人」の生きた時代は、個性豊かで魅力に富んだ人物が続出し、後世の関心を集める時代だった。中でも、「この人」の属した豊臣政権と豊臣一族は、史上稀な急成長と

きらびやかな外見とによって、人々の興味を誘う集団である。にもかかわらず、秀吉自身を除けば、最大の功労者であり最高の実力者であった「この人」だけは、後世の人々に語られるような部分をほとんど残さなかったのである。

桑田忠親氏の大著、『豊臣秀吉研究』の巻末には、秀吉とその周辺の人物や事件に関して明治以来公刊された書物二百余点と論文約五百点が網羅されているが、その中にも「この人」を主題・主人公としたものはただの一点も見当らない。敢えてそれらしいものを捜し求めるとすれば、秀吉の家臣または一族について列記した書物の中に、「この人」の名――豊臣小一郎秀長または大和大納言秀長――を付した小節を見る程度である。

しかし、誤解ないように繰り返すのだが、「この人」に関する記録が皆目ないというわけではない。「この人」の名は史書にも史料にもかなり出て来るのであり、大筋においてその生涯と事績を跡づけることはある程度まで可能だ。ただ、「この人」自身を主題または主人公とする研究や書物がないのである。つまり、「この人」は常に脇役として登場する。そしてそれが、「この人」の果した役割に最もふさわしい出方なのだ。そんな役回りを、今日の言葉では「補佐役」と呼ぶ。「この人」は、日本史上最も典型的な、最も有能な補佐役であった。そして、そうあること以外を望まなかった。私がこれから描こうとしている人物・豊臣秀長とはそんな生涯を送った人である。

補佐役――それは、参謀ではない。専門家でもない。もちろん、一部局の長、つまり中間管理者でもない。そしてまた、次のナンバー1でもない。

「この人」は、豊臣家という軍事・政治集団の中でナンバー2の地位にあった。それは、秀吉がまだ木下藤吉郎とすら名乗っていなかった頃から、関白太政大臣として天下に号令するようになるまで変らない。「この人」からナンバー2の地位を奪えたのは、「この人」自身の病死だけである。

「この人」は、豊臣家の外的発展と内部調整において多大の功績を残した。時には、兄・秀吉すらなし得ぬことをした。兄・秀吉がやりたがらぬこともした。秀吉が行うことにも協力した。だがそれを、自らの姿が目立たぬようになし遂げた。「この人」の役割は、驚くべきプランを提唱することでもなければ、一部局を率いることでもなく、兄・秀吉と同体化することだった。

「この人」は、経歴の古さにおいても、実績の多さにおいても、実力と権力の大きさでも、兄・秀吉に次ぐ存在だった。誰疑うこともないナンバー2だった。だがその故をもって、次期ナンバー1を目指すことはなかった。「この人」の機能は、「補佐役」であって「後継者」ではなかった。

「この人」は、そういう役回りを不満に思いはしなかった。むしろそれを自分の天命と考え、よき補佐役たることに誇りを持っていたことだろう。「この人」は、兄と自分が

一体となって形成する豊臣家のトップ機能の堅固さにこそ歓びと満足を感じていたに違いない。「この人」は参謀として謀をめぐらすこともなく、専門家として才技を誇ることもなく、次のトップとなることを望まず、何よりも自らの名を高めようと欲することなく生きた。それ故にこそ兄・秀吉と同化し真のトップ機能の一部となり得たのだ。

「この人」の死は、豊臣家の首長機能を著しく弱体化した。よき補佐役を失った秀吉は、ただ一人で首長の機能全部を果さねばならなくなり、多忙と孤独、独善と焦りに陥ち込んでいく。このため、豊臣政権における内部調整の不備が、「この人」の死と共に噴出する。「この人」に代るよき補佐役が見つからなかったのだ。

史上に、優れた首長は数多い。天才的な参謀も少なくない。才能豊かな専門家や忠実勇敢な中間管理者も多数登場する。だが、よき補佐役はごく少ない。そして、補佐役を描いた物語はなおさらに少ない。

現代社会においては、戦国時代にも増して補佐役が必要である。人間の活動範囲は一段と拡大し、社会は一層に複雑化した。情報は多く決断は急がれる。首長にかかって来る仕事は猛烈に多い。だが、よき補佐役を持つ首長は決して多くはない。

組織の首長は、人材を求め、人材を育てようとする。よきスタッフ、よき専門家を捜す。よき後継者を育てようとする。だが、よき補佐役を捜し育てようとするトップは、必ずしも多くはない。そしてそれ以上に補佐役たろうと志す者は少ない。組織のナンバ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

ー2の多くは、「次期ナンバー1」か、大部局を担当する「部局の長」だ。首長を補佐する社長室長は、栄進の中での一時的役職であって恒久的な補佐役にはなり切っていないのが普通である。

この意味で、きわめて脆弱（ぜいじゃく）な組織の中で終始よき補佐役を勤め抜いた「この人」――豊臣秀長――は、日本史上稀にみる存在であり、現代において最も望まれる人材だったような気がする。

私が、あまり書かれなかった「この人」を、敢えて描こうとしているのはこのためである。

目

次

はじめに 3
小さな幸せ 17
生涯の決心 46
危ない道 70
梢は高く、根は深く 95
試練、そして出世への道 126
美濃の夢 149

敵中に功あり　173
竹中半兵衛　199
「天下布武」走る　222
上　洛　246
深慮の貧乏くじ　265
敗走の功　291
試練のとき　318

豊臣秀長

ある補佐役の生涯　上

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton